

開所 5 周年記念公開講座

外国人日本語教師として日本で教える

Teaching Japanese in Japan as a Non-native Teacher

いじよんみ

YI Jungmi

1. はじめに

2016年3月6日に、国際言語文化アカデミアにおいて「外国人日本語教師として日本で教える」という題で、筆者の日本語学習者時代から現在の日本語教師になるまでと日本語教師になって感じたことを紹介し、外国人日本語教師が日本で教えることの意義を語った。本報告では公開講座の内容と会場のみなさんとのやり取りをまとめ、さらに再考したことをご報告したい。

2. 公開講座「外国人日本語教師として日本で教える」

2-1. 日本国内の留学生

法務省によると、平成27年、日本には223万人の外国人が滞在しており、そのうち24万人が留学生で、在留外国人の約10%を占める¹。日本国内で日本語教育を行っているのは、大学や専門学校等の高等教育機関と日本語学習を主目的とした日本語学校、そして、ボランティアによる地域の日本語教室と大きく3つに分けることができる。

学生受け入れ数拡大のため日本政府が1983年に実施した「留学生10万人計画」は2003年に達成し、現在は「留学生30万人計画」(2020年まで)が進められている。「留学生10万人計画」の際には留学終了後には帰国することが前提だったが、「留学生30万人計画」では留学終了後も日本に残って就職することを肯定的にとらえ、大学卒業後も就職活動ができるよう半年の滞在延長を可能にするなど、日本に残ることをバックアップしている。つまり、30万人計画には外国人も共に日本社会で暮らそうという意味が込められているところが10万人計画との違いだと言えるだろう。

2-2. ペアワーク:外国人の仕事

講座内で「知っている外国人はどんな仕事を持っているか」を受講者ペアで考えてもらい、「会社員や介護職、スポーツ選手」などが挙がる。次の「外国人がしていたら驚くかもしれない仕事」との問いに、テレビで見た外国人の和紙職人やタクシー運転手、といった職業が挙げたが、一方で、日本人の精神が込められている柔道などはその精神まで外国人に理解することは難しく、ましてや柔道を教えることは外国人には難しいだろうといった意見も出た。

2-3. 筆者の立場の変化

2016年で来日10年目、日本語教師歴6年、韓国語教師歴8年になる筆者だが、日本語と関わる立場は「日本語学習者」「日本語教育研究者」「日本語ボランティア」「日本語教師」と大きく4つある。「日

本語学習者」時代は日本語の勉強を始めた大学から長崎での留学1年を経て再来日までの7年間で、日本語は勉強するものと認識し、日本語の知識を増やすことに喜びを感じていた時期である。だがその一方、日本語の知識を増やしても心のどこかで釈然としない「モヤモヤ」したのを感じ、日本語を教える視点から答えを探そうと再来日し、大学院の日本語教育研究科に進学した。

大学院(「日本語教育研究者」)では、常に「一個人」としての考えを求められ、日本人学生でも留学生でも対等な立場で自分の意見を語ることの大切さを学んだ。また、あるボランティアの日本語教室を見学に行った際に「一緒に日本語ボランティアをやりませんか」と声をかけられ、「私を受け入れてくれる」「求められている」という喜びを感じた。これがきっかけで2007年から現在までこの教室の活動に関わり、現在代表も務めている。このように、常に日本語で考える経験、一個人として人と関係をつくる経験をすることで筆者の日本語に対する釈然としない「モヤモヤ」したものは自然となくなっていった。

「日本語教師」として働き始めたころは、学生の質問に明確に答えられないことへの不安が大きく、「外国人教師だから知らないんだ」と評価されることを恐れていた。それは外国人ならではの不安だとばかり思っていた。ところが、同僚の日本人教師も同じような不安を抱いていることや不安と付き合いながら仕事をしていることを知り、外国人日本語教師であることを負い目に思わなくなった。そして、少しずつ経験を積んでいくうちに、大事なことは学生との信頼関係を築くことであることに気づく。

「日本語学習者」時代までは自分が外国人であることを意識していたし、実際にそのように見られていた。大学院に入り、自身の考えを言語化したり書いたりすることがなかなかできなかった際も、それは日本語の知識がまだ足りないからだとばかり思っていたが、周りの日本人学生も同じであることに気づく。そこで初めて自分を「外国人」としてでなく「一個人」として意識するようになった。「一個人」としての自分を意識するようになってからは、周りとの関係も少しずつ変わっていった。ただ、筆者が自分自身を「一個人」と思っている、周りからはまだ「外国人」として見られることもある。今勤めている日本語学校には筆者を含め、2名の外国人日本語教師がいるが、外国人教師が採用されたのは筆者らが初めてのことで学校側はプレッシャーを感じていたようだ。日本語教師が日本人ではないことによる学生からのクレームなどが気になっていたそうだが、学生や同僚の日本人教師からの評判などを聞き、結果的には採用してよかったと言われた。つまり、採用当初は「外国人」という枠組みで案じていた学校側が、「一個人」として評価するようになったのだ。

2-4. 外国人日本語教師として日本で教えることの意義

日本語教育が、日本語をより知っている人が知らない人に教えることや、ただ言語知識を伝えることであるなら、筆者のような外国人日本語教師は知識の量では日本人にかなうわけがない。今までの経験を振り返ってみると、「外国人」としてではなく「一個人」として自分自身を意識し、また、外国人対日本人でなく、一個人対一個人としての関係を構築できたときに、気がつけばその関係性がある場が筆者の居場所になっていたように思う。つまり、日本語を通してお互いを認め合う関係を築くこと、その関係性の中で「ここにいてもいい」と感じられる、自分自身の「居場所」を作ってきたのだ。そう考えたとき、この日本語を通じた居場所づくりこそ、筆者が大切にしたいことであり、そうした居場所を獲得してきた元学習者である筆者が日本で日本語を教えることの意義がここにあるのではないだろうか。筆者自身が日本語

を通して日本で居場所をつくってきたように、留学生やボランティアの日本語教室に来ている参加者(外国人であれ日本人であれ)にもそのような居場所の大切さを知ってもらい、教室にいる人々が日本語を通してそれぞれ居場所をつくっていけるような教室活動を今後も実践していきたいと思っている。

3. フロアとの質疑応答

講座最後の質疑応答でいただいたコメントで印象的だったのが、「外国人日本語教師は学習者と同じ目線を持っているから、学ぶ側には安心できるのではないか」という感想だった。筆者は日本語を学ぶ人に、筆者と同じ方法で日本語を習得してほしいわけではない。一人一人習得過程は違うのだから筆者と同じことをしたからといって全員に同じ結果が出るとは思えないし、日本語を学ぶ人たちもまた、筆者に求めているものは学習方法ではないだろう。大事なものは、相手をどう考えるかである。相手を「地域社会で共に暮らす人」と考えれば、そこには外国人、日本人という枠組みがなくなり、同じ日本語話者という日本語を介した相互作用の可能性が残り、そこから一個人としての関係をつくっていくことが大事なのではないだろうか。

4. おわりに

今回の公開講座では、「外国人日本語教師として日本で教える」をテーマに筆者自身の日本語学習経験、日本語教師になってからの悩みや考えたことなどについて経験談を中心にお話した。日本で働く外国人日本語教師はまだまだ少ないが、これを機に少しでも多くの人にその存在を知ってもらえることを願っている。

(淑徳日本語学校 非常勤講師)

¹法務省ホームページ、

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html、2016.01.18.